

## ショパンコンクール四位の今後に期待

吉田 真人

オミクロン狂騒の中ではあるが、コンサートに行った。

二月五日、池袋西口の東京芸術劇場、NHK交響楽団。当初予定の欧州人指揮者とソリストが、折からの外国人締め出しにより来日叶わず、急遽日本人に交代となった。ソリストは小林愛美となり、シューマンのピアノ協奏曲を弾くという、これは思わぬ幸運だ。指揮は下野竜也。

五年に一回開かれるショパンコンクールで、昨秋第四位となったばかりの小林愛美が、どんな演奏をするのかと期待が高まる。

シューマンのピアノ協奏曲は1845年のドレスデン在任時に発表されたもので、流麗な中に既に当時予兆のあった精神異常の影をふと忍ばせる所が、何とも言えない魅力とと思われる名作である。

さて小林愛美の演奏。堂々とした演奏で、流麗さも失われていない。合格点だが、全体として若々しさが覗われるのが強いて言えば減点か。当然だ、彼女はまだ二十六歳、作曲者のMADNESSを表現するには若すぎる。いつの日か、シューマンが最晩年に在任したデュッセルドルフに行き、身投げを図ったライン河畔に是非佇んで欲しい。

過去のショパンコンクールにおける日本人女性の入賞者（四位以上）は次の通り。

中村紘子 1965年四位 映像でしか聴いた事がない。元気の良すぎる演奏で、残念ながら音響効果が整ってなかった時代の寵児であったか。

内田光子 1970年二位 今や当代一のモーツアルト弾き。二十年ほど前にロンドンで聴いた。物の怪に憑かれたかのような演奏で、ゲーテが「モーツアルトの音楽は、人間をからかうために悪魔が発明したものだ」と言ったのはこの事か、と納得した。在英生活長く、現在は英国籍。デイムの称号を授与されている。

小山実稚恵 1985年四位 年に一回は聴きに行く。やや優等生的演奏だが、何時も安定しており安心できる。

小林愛美が、今後の歳月と共に、どのように成長してゆくか楽しみに見守りたい。併し、成熟する前に当方が枯れてしまう恐れが十二分にあるが。

2022年2月27日